

第1回「日本語大賞」

テーマ 「人と人をつなぐ日本語」

大学生・専門学校生・一般の部 優秀賞 受賞作品

「魔法のことば」

愛知県

藤井 規子

「うるさい！ お前ら、さっきからどういっつもりだ。いいかげんにしろ！」

男性の大声が、客席数二千五百のホールに響き渡った。

その日、娘の高校時代の担任の先生たちが企画した「青少年のためのオペラ入門」という催しに招かれた。実際にオペラが上演されるホールで、『魔笛』が解説つきで演奏されるというので、この年にして初オペラの私は、楽しみに出かけていった。会場は、高校生や大学生、音楽関係の先生方、そして私のように青少年の仲間入りを許された大人で、ほぼ満席状態だった。

舞台装置は作らず、通常はオーケストラピットに入るオーケストラをステージに上げ、バックのスクリーンには歌手の顔をアップで映し出し、まさにオペラを細部にわたり観てもらおうという演出は、若い子たちにも分かりやすくいいだろうと思えた。が、客席はどうも落ち着かないようで、少しざわついていている。そんな状態のまま、何曲か演奏し終え、ナビゲーターが次の場面の説明を始めた時、会場の後方から、その怒声が起こったのだ。

ざわついていた会場全体は、一瞬で静まり返った。ナビゲーターも、声のほうに目をやり、言葉につまってしまったほどだった。

実は、それが起こる少し前に、私の後ろの席にいた女子高校生たちが、同じようにお喋りを注意されるという場面があった。開演直後からヒソヒソ話をしていた彼女たちは、小声なので迷惑はかかっていないと思っっているらしく、いつこつに止めそうにない。周囲の人は、いちように舞台上に集中できず、苛立ちの表情を浮かべ始めていた。すると、曲の演奏が終わった直後、隣席のA氏が振り向き、

「会場の雰囲気をごわすから、演奏中はお喋りをやめて、ちゃんと聴こうね」

と声をかけた。高校生たちは、会話が周囲に聞こえていたことに驚いたようで、「はい」と小声で答えると、その後はお喋りすることはなかった。

A氏と、怒鳴り声の主は、「君たちのお喋りは、演奏を聴くのに耳障りだからやめてくれ」という内容のことを言っている。でも、大きな違いは、A氏は短い言葉の中に、オペラ鑑賞の心得も含め、若い子たちに「一緒に楽しもう」と伝えた。一方、怒鳴り声の主は、怒りの感情をそのまま言葉に落として相手にぶつけてしまったために、舞台の進行を妨げ

てしまった。感情をぶつけられた人たちも、たぶん恥ずかしさで、その後はオペラ鑑賞どころではなかっただろう。

同じ内容でも、言葉の選び方ひとつで、結果が大きく違ってくる典型を見る思いだった。そして、三十年以上も昔の自分の、苦い思い出にも重なっていった。

東京で大学生を送る私は、アルバイトで都内の定期観光バスのガイドをしていた。ある日、出発直後から、一人のお客様に揚げ足取りをされたり、からかわれたりし続けた。私は、そのお客様を無視する形で、感情を押し殺し事務的な観光案内を続けた。乗務を終え、控え室に戻ってきたとたん、こらえていた感情が大爆発し、ガイドの大先輩で指導者でもあったOさんに、どんなにひどい目にあったのかを訴えていた。するとOさんは、静かな口調で言った。

「あなたじゃなくて、その悪態に一日中付き合わされた、ほかのたくさんのお客様が、

一番の被害者だとは思わない？ お客様を気分よく過ごさせてあげるために、私たち

ガイドは、言葉を使って仕事をしているのよ。お客様から、最後に感謝の言葉を引き出せるように、言葉をつくしてみなさい」

ガイドの仕事を理解していなかった自分が、恥ずかしかった。観光案内だけなら、録音テープを回しておけばいいはずだ。私たちガイドの役割は、乗り合わせたお客様たちの心をつなぎ、より楽しい思い出作りのお手伝いをすることだ、と。そのために、お客様を心地よく過ごさせるための言葉を、常に意識していよう。学生の私には、難しい作業だったが、少しずつでも自分の中に、言葉の引き出しを増やしていこうと決めた。

例えば、出発の挨拶を始めると、年配の男性から「ガイドさん、歳いくつ？」なんて、大きな声で聞かれることが、しばしばある。

「それは、観光案内には関係ありません」と言うかわりに「サバ年生まれの、はたちになりました」とかわす。車内は、笑いの渦に包まれ、お行儀悪く大声を出したお客様は、「このガイドは手強いぞ」と悟り、二度とからかうことはなくなる。しかも、緊張ぎみの表情で乗り合わせた知らない人どうしが、仲良くなるきっかけともなるのだから、これぞ魔法の言葉！

また、下車箇所で時間通りに戻らないお客様がいて、待たされている多くのお客様の苛立ちの視線が痛いことがある。そこへ、必死の表情で走ってくるお客様。きつと、身の縮む思いだろう。そんな時は、「遅い！ 皆が待たされて迷惑していましたよ」と言いたいところを、「迷子になられたかと、皆で心配していました」と言い、待たされた多くのお客様には「ご心配いただきましたが、皆さまのご協力のおかげで、全員揃って次の下車

箇所へ向かうことができます。ありがとうございました」と言う。遅れてみえたお客様は、ちよつと救われた顔をするし、待たされていたお客様は、それまでの苛立ちを忘れ、ずつと心配していたかのような錯覚に陥るのか、「よかった、よかった」という微笑みにかわる。みんなをいい人にしてしまうから、これも魔法の言葉！

この魔法の言葉は、人の立場に立つと、自然に口について出てくるということが、だんだん分かってきた。そして、それはプロが仕事として使うテクニクなのではなく、人と向き合うとき、最も大切にしなければならぬことであることも学習したのだった。そんな当たり前のことが、あの当時の未熟な私には、分かっていなかったのだ。

さて、「青少年のためのオペラ入門」は、怒声のおかげかどうか分からないが、会場は静かになり、ナビゲーターの楽しい進行で、無事最後の曲が演奏された。その曲が終わったとたん、たぶん音楽関係の先生方だと思われるが、「ブラボー！」と客席のあちこちから、会場全体をリードするように声が掛けられた。すると、それにつられて、とびきりの大声で、若い声の「ブラボー！」が聞こえてきたのだ。それは、私の後ろの席の、あのヒソヒソ話の女子高校生たちだった。

彼女たちは、自分たちが十分楽しめたことを、舞台の出演者たちに向かつても、A氏に向かつても、伝えたかったに違いないと思った。素直な感情の持ち主の彼女たちに、「ブラボー！」をおくりたくなった。

この先、若い人たちのマナー違反を目にしたら、怒りの言葉を投げてはいけない。それは、これまで自分たちが教えてこなかった結果なのだからと反省し、かつて未熟だった自分が先輩たちに導かれたように、未完成で未知の可能性を秘めた若い人たちを、ステキな大人にするための魔法の言葉をかけ続けていこうと思った。魔法の言葉修行、これからも続けます！